筑波社会科研究　第16号（1997）

日本史教育における「山民社会」の視点の導入の意義

高　橋　直　英*

はじめに

昨今の急激な社会情勢の変化のなかで，社会科教育も新たな変化を求められている。例えば戦後民主主義において普遍的な価値とされ，社会科教育のなかで目標とされた自由，民主，または近代などといった価値概念を，その意義を評価しつつ，改めて考え直す必要があるだろう。さらに地球環境問題，高度情報化社会への対応，民族問題など，21世紀に向けてさしせまった問題に答えられる社会科教育を志向しなければならないであろう。

日本史教育についても，そのような観点から再構成する必要があると思われる。その際に基礎となるのは，従来からしばしば指摘されている通り，変革主体としての民衆の活動に注目することであり，主体的な民衆の活動が歴史の展開の原動力となっている，という視点を強調することがひとつにはあげられるであろう。ややもすれば日本史教育では政治史，制度史中心の学習に重点が置かれやすい傾向にある。しかし現代の高校生が抱く漠然とした不安の要因である経済不況，地球環境破壊，核兵器の恐怖，飢餓の増大，金権汚職などの問題が取り巻く現代社会のなかで，生徒自身が主体的に社会に関心をもつようになるためには，そのような視点を歴史学の成果に積極的に学びつつ，提示することがひとつの手がかりになると思われる。

日本の前近代社会のなかで一般に民衆という場合，その多くが水田稲作を中心に営む農民を指すことが多かった。「日本社会＝水田農耕社会」という考え方をアプリオリの前提とする考え方は現在においても根強く残っている。確かに日本社会は，水田稲作農耕なしにして形成されなかったことは否定されようがない事実である。しかし特に近年の歴史学や関連する分野の成果によれば，山や海など多様な日本列島の自然環境に適応した，多様な社会のありかたが明らかになっている[1]。そのことの認識なしには著しく偏った歴史像しか得られないであろう。

さらにいうならば教科書が描く一面的な日本列島像が，現在都市部の生活者が地方の住民に抱く侮蔑感，また地方の生活者が自分の住む地域に対して「俺達の住んでいる場所はなにもないつまらない場所」というような自虐的な感情を抱く遠因となっているとさえ思える。そのような感情を克服するためには，自分の住んでいる地域での民衆の活動に注目することで，自らの地域での民衆の活動が歴史全体を動かす原動力となっていた，ということを強調する視点が必要であろう。

本論では日本列島に展開した多様な社会のうち，とくに山間地域に展開した山村，山民の社会の歴史的意義について確認し[2]，そのうえで山民の社会の視点を日本史教育に導入する可能性について探っていきたい。現在は高度経済成長期の「民族史的転換期」を経て，例えばイエの変質などという問題に端的にあらわれているように，おそらく中世後半から近世にかけてその原型が成立したとされる伝統的な社会が崩壊し，また日本列島の社会の画一化が進展している時期にある。そのような時期においてこそ，山民の社会を含めたそれ以前にあった多様な社会のあり方を学習することは，大きな意味のあることだと考えられる。

* 茨城県立明野高等学校教諭

1　山民社会研究の背景としての「社会史」研究

日本列島は面積の約80％を山地が占め，さらに複雑な海岸線を構成している。そこでは独特の自然環境に適応した独自の社会が展開していた。この至極当然の視点が，戦後のある時期まで歴史学には軽視される傾向にあり，1970年代流行とまでいわれた「社会史」や民衆生活史の定着とその成果の蓄積によって，ようやく問題とされるようになった。

歴史が現在的課題から書かれる性質のものである以上，ある時期の研究の潮流はその時代の課題と密接に関連していることはいうまでもない。安保闘争など民衆運動の高揚，高度経済成長を通じての社会の変動という社会情勢のなかで，日本人とは何ものであるか，という問いから1970年代にいわゆる「社会史」や民衆生活史が注目されるようになってきた。「社会史」はそれまでの文献史料を素材とした政治史中心の歴史学に対してのアンチテーゼとされ，その特徴は多岐にわたっており，また「社会史」そのものに対しての評価も現在においても一定ではなく，ここでは触れられないが，それまでの歴史学が文献史料中心の政治史中心の傾向にあり従って支配者中心であったのに対して，「社会史」は文献史料以外の民間伝承や考古資料を通じて，政治の中心から離れた周縁の人々にまで着目し，文字に表現されない心性をも含んだ民衆の生活に注目するものであるということは，甚だ粗い言い方であるが，表現することはできるだろう。

1970年代から現在までの「社会史」の潮流のなかで第一人者と目されているひとりとして，網野善彦氏があげられる[3]。網野氏は1970年代から意欲的な作品を発表し，現在にいたっている。最近の網野氏の問題提起は多岐にわたっているが，その特徴を鹿野政直氏は次のように簡潔に整理している[4]。

「日本」という国号を意識化し，「日本」が歴史的な産物であることの指摘、「非農業民」という範疇の提示，日本社会は農業（特に水田稲作農耕）社会である，という「水田稲作史観」を批判し，日本列島には農民以外にも，海民・山民をはじめ商工民，芸能民など多様な社会が展開していたことの指摘，「無縁」「公界」「楽」と表現される，原始以来の無主・無所有の原思想を見出したこと，後醍醐政権の性格の分析することを通じての天皇制への追究，単一民族神話批判と東国・西国史観の提唱，海からの視野の提唱，国境の枠を超えて民衆に共通する心性や民族的特質の究明，以上の七つである。網野氏は非農業民の研究から，とりわけ海民の研究を蓄積していった。そしてそこから海からの視野が導き出された。鹿野氏はそこから，①「海村＝寒村」というイメージを転換させる意味をもつこと，②海は人と人を隔てる障壁と考えがちであるが，実際は人と人とを結ぶ緩やかな交通路としての役割を担っていたこと，などを指摘している。網野氏の一連の研究によって，日本列島における海民の位置づけが正当に評価されることとなった。しかし現段階において網野氏の研究で，山民についての研究は，その必要性が提起されつつも，現在緒に就いたばかりというのが現状である。

そもそも山民，または山村についての研究は，地理学，民俗学，社会学，農学などの分野で盛んであった。何をもって山民と定義するか，または何をもって山村と定義するかは，各分野のなかでも様々な見解があり一致をみていない。しかしそのいずれもが，山村や山民の生活，文化を問題とする場合，水田稲作農耕を主な生業とする地域とは何らかが異なった類型として認識し，その独自の生活や文化のあり方を認識しようとした点は共通している。

2　山民社会についての研究の動向

山民の生活・文化を含めた社会への注目は，近代以降に限定すると，日本における民俗学の創始者，柳田國男をまず挙げなければならない。柳田は明治末期から大正初期にかけて，山民社会に関心を寄せ，多くの論考を残している。その最初は柳田が法制局参事官だった明治41（1908）年，九州旅行の際に宮崎県臼杵郡椎葉村を訪問したのが，山民社会に関心を寄せる直接的な動機であったとされている。柳田はその後，明治末期から大正初期にかけて数々の論考を発表したが，それらのなかで柳田は山民の生活・文化を担った人々を「山人」と呼んだ。「山人」とは，簡潔に述べれば，稲作伝来以前に日本列島に居住した先住民の子孫のことをさし，「山人」は水稲稲作を営む常民と混合して絶滅した，とされた。その後，柳田は「山人」の伝統を見出そうとし，山村固有の文化伝承の総合的実態調査を計画し，柳田の指導のもとで実施されたが[5]，期待された成果が得られず，柳田を失望させた。柳田はそこで山村とは平地社会と比べ，発展の遅れた「奥まった農村」と結論づけ，その後皇国史観のもとで稲作農耕文化の研究に傾倒していった。

第二次世界大戦後の昭和30年代以降，各分野で山民文化を独自の文化類型として位置づけ、フィールドワークに基づいた詳細な報告が数多く行なわれた。それら全てをここで触れることはできないが，各分野での代表的な論考に触れただけでも，非常に多彩であり，ここで全てに論及することもできない。そこで数多くの論考のなかで，とりわけ筆者が日本史教育への導入という観点も考慮して，山民社会を論ずるうえで欠かせないと思われるものを取り上げる。

そもそも山村、山民とは何を意味するのか，この問題に取り組んだのが，地理学から藤田佳久氏や[6]，千葉徳爾氏らである。千葉氏は文献史学が山村の歴史を生産性からみて，「平地の農村の歴史から一時代か二時代遅れてついて行くにすぎない」とする見方を批判し，居住領域の特性の歴史に及ぼす作用を重視した立場から，山村を「後世普遍的となった稲作農業とは異なった体系の、栽培農業ないしは山地資源の採取利用に基礎をおいた社会」と定義している[7]。日本列島から東南アジア，東アジア一帯に共通する文化要素として，照葉樹林文化論を提唱したひとりである佐々木高明氏によれば，山民文化の構成要素には大きく分けて生業・生活の側面と信仰・心意的な側面のふたつがあるという[8]。生業・生活の側面とは，安定的で大量の収穫が期待される水田稲作農耕に対して，山地においては，堅果類、野生のイモ類などの採集活動，狩猟，木工，炭焼き，そして焼畑農耕など，極めて多様な生産活動を営んでおり，水田稲作農耕のような中心となる生産活動は確認できない，という点である。二点目の信仰・心意的側面とは山地で営まれる多様な生産活動の生業神としての山の神信仰のあり方のことである。

それ以外に心意現象についても，山民のそれは水田稲作農耕民とは異なるものをもっていたとされている。

例えば時間観念について，稲作を主な生業とする地域においては，稲作の生産リズムに基づき，1年をひとつのタイム・スパンとする時間観念であったのに対して，焼畑農耕を生活単位にした地域社会には，焼畑農耕の生産サイクル｛山焼き→2，3年の雑穀，イモ類栽培（地域によって栽培の順序がある）→10年以上の休閑期間）｝にあわせた3年や5年，あるいは10年，20年といった時間観念が成り立っていたと予想されるという[9]。

空間概念についても，山民のそれは独自の性格をもっていた。柳田國男は大正4（1915）年に

記した「山に住んだ武士」という文章のなかで[10]，とくに中世について，「山を自分の世界として気楽に住んだ武士」が存在し，国の境界を自由に往来して何カ所にも所領のあった武士の存在を指摘している。この文章の最後で柳田は「山を境界とするのは平地人の思想である」と結んでいる。山を境界とみるのは平地に住む農民的な考え方であり，実際に山地の生活の場としていた山民にとっては，山地は自由な交通路としての役割をもっていたのである。実際に筆者が修士論文で扱った静岡市井川については，南アルプスの東側の大井川源流部に位置し，長野県諏訪地方から南アルプスを越えて当地方へ移住した集団によって村落が開発されたという伝承をもつ。それ以降も「信州の親戚を訪ねにいく」という言葉にあるように，通婚など南アルプスを隔てて長野県側と密接な関係があったとされている[11]。

山村で営まれた生業について，ひとつひとつをテーマとした研究も蓄積が豊富である。具体的には畑作（焼畑農耕）史，林業史，鉱山史などの分野であり，いづれも山村の重要な産業であった。畑作史では稲作以前の農業形態として焼畑耕作に注目して，焼畑耕作を含む共通した文化要素を照葉樹林文化として類型化し，さらに焼畑農耕を営む社会の構造まで分析した佐々木高明氏の仕事がまず注目されよう[12]。さらに佐々木氏は焼畑耕作を営んでいる地域が山地を中心として分布していることから，山地に展開する文化全体への考察へと研究の対象が展開し，先に紹介した通り，それを「山民文化」と定義し，水田稲作を中心に営む文化類型と対比し，その独自性を主張している[13]。また日本列島全国の正月儀礼を詳細に調査し，「餅なし正月」の事例に注目し，「コメ」文化と「非コメ」文化の対立と同化の過程を想定，検証した坪井洋文氏の研究もある[14]。そして栽培作物，農耕儀礼など，日本列島全域にわたって焼畑農耕の実態を詳細に調査した野本寛一氏の研究は，民俗学の立場からの焼畑耕作の研究の現在における到達点といえるものである[15]。林業史の分野では，徳川林政史研究所の紀要が，近世の山村をフィールドに多くの蓄積がある。鉱山史では小葉田淳氏の研究が，鉱山技術の発達について考察し，さらに日本全国の個別鉱山の事例研究を取り上げたものであり，鉱山と村落がいかに関わっていたか，という点についても考察されており[16]，この分野の代表的な成果である。

それに対して文献史料を対象とする歴史学では山村の研究は決して活発であるとはいえなかった。その背景には，山民社会の内容が文献史料として残されることが比較的少ないこと，また文献史料が残っている場合でも，それを山民社会独自の意味のなかでその史料を位置づける姿勢が欠如していることが考えられる。その意味で民俗学や地理学の手法であるフィールドワークを通じて、研究が進められていったのは当然といえよう。逆にいえば山村の歴史を研究する場合，民俗学や地理学の成果を常に意識する必要があるということをも意味している。その際，現在確認される事象が歴史的にいつ頃まで遡ることができるか，常に検証を加えなければならない。

焼畑農耕に関連するものとしては，戦前には近世の農書などを利用して焼畑耕作の経営のあり方を研究した古島敏雄氏の研究があるものの[17]，本格的に関心が抱かれるようになったのは，「社会史」の概念が提唱されるようになった後である。照葉樹林文化論に啓発され，公式歴史書に散見する記述から古代の山民の生活について考察した畑井弘氏の研究[18]，中世の文献史料のなかで常畑をさす「畠」と焼畑をさす「畑」が厳密に使い分けられていたことを指摘した黒田日出男氏の研究などがある[19]。活動主体としての山民のそのもののあり方に触れたものとしては，

非農業民であるタイシが鉱山の金掘りと諸物資の河川を通じての運搬を担った「山の民」であったことを指摘した井上鋭夫氏の研究[20]，笹本正治氏による戦国大名の山村の支配のあり方に関する研究がある[21]。笹本氏は太閤検地において，石高わずか20万石余しかなかった武田氏が，戦国時代何故強大な権力を持ちえたかという疑問から発して，それは結局武田氏が独自の方式で山村を支配したのであり，その方式は石高では表現されないと結論づけている。なお歴史学が，山民，山村についてどのように扱ってきたかを考察したものに，白水智氏の論考があるのでそちらも参考にして欲しい[22]。

以上研究の成果を羅列的に紹介するのみで，またその一部を紹介したにすぎないが，従来からの林業史，鉱山史や農学などの研究の蓄積に，民俗学，地理学などの分野での山村の独自性を強調する研究動向を受けて，歴史学においてはそれらの関連分野の研究成果を取り込んで文献史料に表現されない民衆生活史への注目するという動向（しばしば「社会史」とよばれる）のなかで，山村，山民の研究はようやく諸に就き始めたばかりという段階にある，といってよいであろう。それでも歴史学のなかでは網野氏の研究に触発されて日本列島の歴史の展開における海の役割が強調されているのに対して，関連分野の蓄積があるにもかかわらず，まだまだ不十分である，といわざるをえない段階にあるようである。このような状況のなかで山村，山民そのものを総体として位置づけようとする試みも行なわれている。中央大学文学部では「中央大学山村研究会」が発足している。その活動方針には，本論において既に述べたような問題意識に基づいて，「山村のみを追求して終わるのではなく，日本の歴史全体を視野に入れて山村の占める位置を考えるとともに，山村を通じて日本の歴史をとらえなおし，『人間の歴史のみえる歴史』を目指す場にしていき」たいとしている[23]。当研究会では笹本氏がフィールドにした山梨県南巨摩郡早川町を調査対象地域としているが，日本列島の山村，山民のあり方を体系的に把握するためにも，より一層の研究の深化に期待したい。なお地理学や民俗学での研究が1970年代以降に集中する傾向にあることにも注意する必要がある。高度経済成長期による急激な社会の変化に伴って，失われつつあった山村の文化を記録として保存しておく必要にせまられていたことと無関係ではないであろう。

以上のような研究のなかで明らかにされたことは，山民社会は，他の地域から隔絶した地域に展開し，生産性が低く，自然環境の圧倒的な影響下にある，という従来まで我々が抱きがちなイメージは決して正しくない，ということである。日本列島は山地に海岸部など極めて多様な自然環境のもとにあり，そこに展開する社会も多様な自然環境にあわせて多様なあり方を示していた。そのなかで古代国家をつくりあげたのが，畿内の平野部に本拠を置くヤマト政権であり，それ以降の政治史を概観してみても平野部の権力が中心であった。しかし権力を土台で支える民衆の活動に注目してみると，海や山などを舞台としていることがわかる。権力者の意図ももとに残された文献史料を分析手段とする従来の歴史学が権力者中心になりがちであるのに対して，関連分野の研究の成果に刺激されて明らかにされつつあることは，多様な自然環境のもとで生活する民衆の姿であった。ただし現時点では，海の生活や文化を扱った研究が蓄積されてきているのに対して，山の生活や文化は軽視されているという印象を免れないが，そのことは歴史的評価として，山の地位が低かったことを意味しない。確かに海上交通やそれを介しての流通網の展開など，い

わゆる教科書上で歴史を理解するうえでも，海の役割は決して軽視してはならない視角であることが注目され始めてきた。それに比べて山に展開した山民の社会は，平野部の社会と関わりあう機会は相対的に低かったかもしれない。しかしそれは平野部の社会を基準にした見方であり，山を生活の舞台としていた山民にも，各時代を通じて独自の社会が展開しており，平野部の社会との関係を持っていた。現在，山村を「過疎」だとか「僻地」といった言葉で括られがちであるが，それはあくまでも現代的な価値観からみた考え方であり，前近代社会のなかでは社会的分業の一翼を担う存在として欠かすことのできない存在であったということができるだろう。

3　日本史教育における「山民文化」への着目の意義

歴史教育は原則的には歴史研究の成果に立脚し，そこに歴史教育の論理に基づいて授業を構成する。ここ数十年の歴史研究の成果のなかで，見逃してはならないのがいわゆる「社会史」の問題がある。歴史教育のなかでは，加藤章氏が「社会史」の成果を導入することに積極的な意義を認めているひとりである[24]。加藤氏は，「『社会史』の成果を歴史教育内容に取り込むことは歴史のなかの多様な人間の生き方や考え方の存在にせま」ることができると評価している。加藤氏が網野氏の研究を高く評価しているのは実に示唆的である。加藤氏が，網野氏の研究の論点のなかで，歴史教育再生のきっかけとなるべき視点としてあげているのが，単一国家，単一民族，単一文化観から自由なアジア史的視点をもつことで，従来の国家や地域の枠組をこえた歴史認識を得ること，日本列島に生きた人々の生活感覚から生徒の人間性自身のなかから歴史性を探ること，金石文，地名，年中行事など身近な題材を史料としてとりこみ，新しい史料学を歴史理解のための教材として組み込んでいくことをあげている。これらの視点は「社会史」（特に網野氏の視点）の特徴を歴史教育のなかに積極的に生かす提起と考えてよいだろう。

実際に現在出版されている教科書をみても，「社会史」研究の成果とみられる叙述やテーマ学習の項目が至るところに記述されている。網野氏は，高等学校教科書の大部分が引用している江戸時代の身分別の人口の割合のグラフのなかで，原史料のなかでは農民の他に，海民や山民を含む概念である「百姓」と表現されているものが，従来の教科書のなかで「農民」と表現されているところに水田中心史観の一端をみてとっているが[25]，山川出版社の最新の教科書『詳説日本史』では，同じ分類の項目では「百姓」と訂正されているのは，おそらく今まで述べてきた見地に沿ったものと考えられる。近世史を専門とする塚田孝氏も，旧版『新詳説日本史』と新版『詳説日本史』との近世の村落と百姓の記述を比較して，後者の記述を豊かな近世史像を生徒に導き出す可能性を含んだものとして評価している[26]。ただし教育の場面において，それらの歴史学の成果が，現在の高校生に十分に教えられるかということは別の問題であろう。

そのような問題があるにせよ，歴史の原動力である民衆の姿（特に前近代社会について）を具体化するためには，以上のような視点は欠かすことができないと考えられる。教科書に記述されている民衆の姿とは，弥生時代から前近代社会を通じて，多くの場合水稲耕作を営む農民を指す場合が大半である。なぜそのような考え方が生まれるのかを考えると，ひとつには日本列島の歴史を通じて，権力者の支配のあり方に原因を求められる。つまり律令国家における租・庸・調，荘園公領制のなかの年貢・公事、近世の石高制など，各時代を通じて，権力者が民衆を自らの秩

序に組み込むとき，その基準となるのは水田稲作の生産高であった。権力者が残した文献史料をもとに歴史を構成しようとしたならば，日本列島の大部分が水田稲作を主要な生業としており，その他の産業は補助，補完的な産業であると考えても仕方のないことであろう。

水田稲作を中心にして歴史をみるのは，あくまでも支配者の論理であり，民衆の歴史的発展のあり方をみるためには，水田稲作をみるだけでなく，狩猟，採集，焼畑農業などに注目する必要があるのである。既に触れたように，日本列島のなかで水田稲作を主な生業として営む農民の割合は限られており，網野氏によれば近世の農民の全人口に対する割合は多く見積もっても約50％程度であるという[27]。日本列島には農民以外に，海を生活の場としていた海民や山を生活の場としていた山民などによって構成されていたのである。

また山民は山中のなかで孤立した存在ではなく，平野部の権力や民衆と積極的に交流をもっていた。例えば日本史の学習では，平城京や平安京などの宮都の造営について学習する場合，支配者の動機，動員される民衆の負担，時代背景について学習するだろう。しかし宮都の建造に必要とされる大量の木材は，山民の活動のなかに見出されるものである[28]。また中世史学習においてしばしば教材として用いられる絵画資料についても，山民の活動を伺わせるものは多く存在する。さらに先に紹介した通り，戦国大名は独自の方式で山村を支配し，鉱山経営，木材の切り出しなどをおこなっており，それが戦国大名の権力基盤となっていた[29]。

これらは限られた一例であるが，歴史の原動力としての民衆の活動に注目するためには，農民のみを対象とするだけでは，いかに偏った理解に陥ってしまうか，ということがわかると思う。

日本史教育においては，しばしば権力者中心となりがちであり，そこでは支配される側としての民衆，そしてその中心として農民を想定している。そのことは生徒の歴史意識のなかにも，微妙な影響を及ぼしているとも考えられる。先にも紹介した山梨県出身の笹本正治氏はその著書のなかで，次のように述べている[30]。

> 私は子供の頃から歴史が好きだったが，小学校・中学校・高等学校などで取りあげられてきたのは，主として支配者の名前であり，それを支える存在としての農民であった。そして日本における農民はというと，（中略）農業のみで生計のたてうる農家が基準とされ，その他の農民については申し訳程度に記してあるだけだった。（中略）ところが農業生産力を重視するあまり，職人や商人などはややもすれば軽視された感がある。たとえば日本の国土の約八割は山地が占め，そこにも多くの人々が住んでいるのに，林業および山地に生きる人々の生活についてはほとんど知ることができず，（中略）このため私の父のような，林業にあたり，わずかの土地をたがやすようなものは，あたかも歴史の枠外に置かれているかのような思いをした。

この文章は，「日本社会＝水田稲作社会」というような貧困な日本列島像に基づいた歴史教育に対する苛立ちを表現したものと考えることができる。歴史にあまり関心のない生徒にとっては，さらに歴史教育の内容が自分自身の実感と縁遠いものと写ることはなおさらのことであろう。さらに高度経済成長期を経た現代の若者にとっては（筆者自身も含めて），前近代的社会についての認識そのものが欠如していることが多い。そのもとで前近代社会についての正確な認識を導くことは大変困難な問題となっているであろう。地方に生活する若者が自分の住む地域に対して抱

くある種の自虐的な感情もそのような事情に起因していると考えられる。それに対して歴史教育は，地域に生活していた民衆の多様な活動が歴史を動かす原動力になっていたということを特に強調する必要があるだろう。そうすることで生徒自身が主体的に社会に関心をいだくきっかけになるのではないか，と考えられるのである。

おわりに

白水智氏は論考のなかの引用文献のひとつに，小学校から高校までの社会科教科書における山村の記述の分析した論考を紹介している[31]。その引用文献のなかでは，山村について，地理的分野，公民的分野での記述については考察されているが，歴史的分野に関してはそもそも教科書で全く扱われておらず，問題とされていないことを指摘している。引用文献を直接確認できなかったが，そのこと自体，歴史教育のなかで山民文化の意義が如何に軽んじられているかを示したものといえよう。

しかし以上考察したように，網野善彦氏の仕事を中心とする近年の歴史学の成果によって，日本列島の歴史が決して水田稲作農耕のみでは還元できないことが明らかになった。網野氏の仕事は海民についてが中心であったが，山民の社会についても正当に評価すべき時期に来ているといえよう。ただし「稲作文化＝メインカルチャー」に対して，「山民文化＝サブカルチャー」といういいかたは適切ではない。特に前近代社会においては，山民の社会も，水田稲作を中心に営む社会も，海民の社会も等置して捉えるべきであり，そのような多様な日本列島の文化のあり方を提示することも日本史教育の目標のひとつであると考えられる。ただしここで注意しておかなくてはならないのが，山民文化が稲作文化に優越していた，ということを意味するのでは決してないということである。既に触れたように，水田稲作なくしては，現在の日本社会はありえなかったというのは紛れもない事実である。要は教科書で暗に強調されているように，単純に「日本社会＝水田稲作社会」と規定してしまい，その他は副次的なものでしかないという考え方ではなく，多様な日本列島の自然環境に立脚した多様な生活・文化のもとに展開した歴史の実態を日本史の学習のなかで取り込んでいかなくてはならない，ということである。

日本社会は高度経済成長を経て，急激な変化を経験したことは各方面で指摘されている。網野善彦氏も，この時期を南北朝期に形成された社会構造が大きく転換した「民族史的転換期」と捉えている。そのようななかで従来の伝統的な社会と我々新世代との間には大きな溝がある。新世代の若者の多くが，旧世代まで常識であったものについて，知識を共有できないでいる。伝統的な社会についての感覚は，筆者を含めた現在の若者には，自分自身の実感としては，ほとんどもっていないのが実態である。そのような現状のなかで，歴史認識の基礎になる前近代社会像を正確に認識する必要に迫られている段階にあるといえよう[32]。その際に民衆の活動が歴史を動かす原動力となっていたということを，様々な資料（文献史料、絵画資料、考古資料、民俗資料など）を通して学習するという歴史教育の目標のひとつに基づいて，農民のみでなく海民や山民を含んだ多様な民衆のあり方に注目することが重要である。本論ではそのなかで特に従来軽視されてきた山民の社会について論じたつもりである。そしてその契機となったのは，大学の授業の一環として参加した野外調査を通しての体験から考えさせられたことであり，しばしば野外調査で

一緒になった同級生のなかでも「山間僻地」とか「過疎」というイメージで括られていた山村を，歴史的にみれば決してそうではないのだということを説明しようにもできない自分の歯がゆさから，それを何とか日本史教育のなかで生かせないか，という思いがあった。

そう考えた場合，不十分なところばかりが目立つが，現在まで蓄積されてきた歴史教育の実践研究とその問題点に学びつつ，以上のような視点を意識して，自分自身の問題として如何に歴史教育の実践に反映させるか，という問題を今後の課題としたい。

《註》

1）例えば網野善彦「日本列島とその周辺－『日本論』の現在」（『岩波講座日本通史１－日本列島と人類社会』岩波書店，1993年）pp. 3-37。
2）本論では，日本列島において，主に山間地域を領域とする山村に住み，固有の生活・文化を含んだ社会を営んできた住民を山民と称することとする。
3）網野氏の主張を概観するにあたって，最近の著作で手頃なものとして，『日本論の視座－列島の社会と国家』（小学館，1991年），『日本の歴史をよみなおす』（筑摩書房，1991年），『続・日本の歴史をよみなおす』（筑摩書房，1996年）などがある。
4）鹿野政直「日本文化論と歴史意識」（『岩波講座日本通史別巻１－歴史意識の現在』岩波書店，1995年）pp. 185-213。
5）その結果が『山村生活の研究』（岩波書店，1937年）である。
6）藤田佳久『日本の山村』（地人書房，1988年）。
7）千葉徳爾「日本山村史研究序説」（『民俗と地域形成』風間書房，1966年）pp. 360-397。
8）佐々木高明「山民文化の伝統－縄文文化伝統の再評価」（『縄文文化と日本人－日本基層文化の形成と継承』小学館，1986年）pp. 207-263。
9）宮田登『日和見－日本王権論の試み』｛平凡社（平凡社選書），1992年｝。
10）柳田國男「山に住んだ武士」（『定本柳田國男全集29』筑摩書房，1970年）pp. 412-413。
11）静岡市井川については，平成６年度，筑波大学大学院修士課程教育研究科において実施された地理学野外実験において多くの示唆を得た。平成５年度，平成６年度の調査については報告書も出ているので，そちらを参照してほしい。現在の山村の問題点について，多面的な視野から考察されていると思う。筆者も甚だ不十分ながら修士論文（平成７年度提出）において，井川地方における戦国・織豊期の村落の構造，周辺の社会への関わりについて考察した。また静岡県教育委員会編『田代・小河内の民俗－静岡市井川』（静岡県，1991年）もあわせて参照してほしい。
12）『稲作以前』｛日本放送出版協会（ＮＨＫブックス），1971年｝。
13）前掲註 8）。

14）坪井洋文『稲を選んだ日本人』（未来社，1982年）。
15）野本寛一『焼畑民俗文化論』（雄山閣出版，1984年）。
16）小葉田淳『日本鉱山史の研究』（岩波書店，1968年）。
17）古島敏雄「焼畑農業の歴史的性格とその耕作形態」（『古島敏雄著作集３』東京大学出版会，1943年）pp. 238-272。
18）畑井弘「山野の聖域的先取と焼畑農耕民の反抗－非律令的世界の反逆」（『日本歴史』 336，1976年）pp. 41-59など。
19）黒田日出男「中世の『畠』と『畑』－焼畑農業の位置を考えるために」（『日本中世開発史の研究』校倉書房，1984年）pp. 142-146。
20）井上鋭夫『山の民・川の民－日本中世の生活と信仰』（平凡社，1981年）。
21）笹本正治『戦国大名と職人』（吉川弘文館，1988年）。
22）白水智「文献史学と山村研究」（『日本史学収録19』筑波大学日本史談話会，1996年）pp. 1-18 。
23）『中央大学山村研究会報告集Ⅲ』（中央大学山村研究会，1994年）。
24）加藤章「歴史研究の多様化と歴史教育内容の変化－構成原理としての社会史」（『社会科教育論叢』37，1990年）pp. 39-49。
25）網野善彦『日本史再考－新しい歴史学の可能性』｛日本放送出版協会（ＮＨＫ人間大学テキスト），1996年｝。筆者が確認した教科書についてみると，『新詳説日本史』（山川出版社，1995年），『日本史Ｂ』（実教出版，1994年），『新日本史Ｂ』（自由書房，1995年），はすべて「百姓」とすべきところを「農民」と表現している。
26）塚田孝「近世社会像と教科書記述」（歴史教育評議会編『前近代史の新しい学び方－歴史教育と歴史学との対話』青木書店，1996年）pp. 276-283。
27）前掲註25）など。
28）例えば橋本鉄男「杣人の伝統」｛大林太良編『日本の古代10－山人の伝統』中央公論社，1987年（文庫版1996年）｝pp. 209-245，など。
29）笹本正治「早川流域地方と穴山氏」（『戦国大名武田氏の研究』思文閣出版，1993年）。
30）前掲註21）。
31）前掲註22）。
32）そしてそのような必要をもたらした高度経済成長期を現代史のなかに的確に位置づけることも，今後の日本史教育の課題として浮上してくるだろう。